

## 茶とアヘン戦争

児玉 寛嗣

米中の対立が激化しているなか、アメリカが高性能半導体の対中国輸出を禁止するという手段にでた。相手が必要としているものの輸出を禁止するということはいつの時代にもあったが、それは危険をはらむものでもある。例えば、アメリカから日本への石油輸出の禁止が発端となって太平洋戦争が起きた。近代史のなかでイギリスと中国の間で起きた出来事を振り返ってみる。

イギリスで貴族が茶を飲むようになったのは十七世紀以降のこと。十八世紀後半には庶民も日常的に飲むようになり需要が爆発的に増大した。茶は中国（当時は清）や日本でしか採れなかったし、清は茶の苗木の国外への持ち出しを堅く禁じていた。

イギリスが貿易の出来るのは広東のみに限定され、茶は朝貢貿易に近いような屈辱的な条件で輸入するしかなかった。

茶の需要拡大に呼応して清との貿易を増やそうと綿製品、機械類などを盛んに売り込もうとしたが、清は「我が国に不足しているものはなにもない、綿製品や機械類など必要ない」と取り合わなかった。イギリスが貿易条件改善などの交渉をもちかけると、茶の輸出を止めた。でも、清にとつても茶は貴重な外貨獲得の手段であるので数ヶ月で輸出は再開されたが、輸出禁止は度々行われた。茶は必需品、入って来なくなると暴動が起きたかもしれない。

イギリスは清から輸入ばかりで輸出するものがないので、茶の対価は銀で支払うしかなく、大きな貿易赤字となった。そこで植民地のインドでアヘンを栽培して、清に売りつけて貿易赤字を解消しようとした。清でアヘン中毒が蔓延して清とイギリスが衝突して起きたのがアヘン戦争だ。

実はイギリス人はこっそりと茶の苗木を清から持ち出して、インドの北部、ダージリンで茶の栽培に成功していた。それは、アヘン戦争の二十年近くも前のことだ。もし、インドで栽培が大々的に行われ、清からの輸入の必要がなければ、イギリス人も良心の呵責を覚えるアヘン戦争は起きてなかったかもしれない。